

# 高校生の悩みの経験・深刻度が被援助志向性及び援助要請行動に与える影響

臨床心理学研究科 臨床心理学専攻 1000 - 170701 岩井 千夏

指導教員 山口 豊一 教授

## 問題と目的

いじめや不登校、自殺などの課題は、近年メディアなどでも大きく注目されている。高等学校においては、自殺（学校から報告があったもの）が小・中学校より多く（文部科学省，2018）、高校生を援助するにあたり大きな課題の一つといえる。高校生などの子どもの悩みや援助は、学校心理学において、学習面、心理・社会面、進路面、健康面の4領域に分けて考えられている（石隈，1999）。これら4領域は、子どもをトータルに援助することを目指す心理教育的援助サービスの指針となる。

このような悩みや課題を抱えている高校生において、他者に援助を求めることは適切な援助を得て問題状況を乗り越える上で有用な手段である。つまり、援助要請は、個人が問題を解決する可能性を高めるために有益であるといえる（DePaulo, 1983）。

そこで本研究では、学校心理学の視点から、高校生の学校生活の困難さを「悩みの経験と深刻度（悩み・深刻度）」からとらえ、高校生の悩み・深刻度が被援助志向性及び援助要請行動にどのような影響を与えるのかを明らかにする。

## 方法

2018年7月から9月にかけて、関東県内の高等学校に在籍する高校1～3生859名（有効回答率55.30%）に質問紙調査を実施した。質問紙調査では、フェイス項目（学年、クラス、コース、性別）と、悩みに関する項目27項目について、悩みの経験、悩みの深刻度、被援助志向性（誰に相談したいか）、過去6か月間の援助要請行動の量を尋ねた。なお、被援助志向性における相談相手の選択肢としては、「誰にも相談したくない」、専門的ヘルパー（「スクールカウンセラー」「校外の専門機関の先生」）、複合的ヘルパー（「担任の先生」「教科の先生」「部活動の先生」「進路指導の先生」「生徒指導・教育相談の先生」「保健室の先生」「学校内のその他の先生」「塾の先生」）、役割的ヘルパー（「親」「兄弟姉妹」）、ボランティア的ヘルパー（「友人」「先輩や後輩」）「その他」の16項目のうち、いくつでも選択できるものとした。

## 結果と考察

高校生の悩みに関する 27 項目 (悩みの経験×悩みの深刻度) について、最尤法・Promax 回転による因子分析を行った。その結果、「学習・進路」「心理・社会・健康」「先生への不満」の 3 因子 20 項目からなる悩み・深刻度尺度が作成され、十分な信頼性とある程度の理論的妥当性が得られた。高校生においては、学習面と進路面、心理・社会面と健康面の関連がそれぞれ深いこと、先生との関係は、友人や家族との関係とは別の課題状況として考える必要性が示唆された。

悩み・深刻度尺度の各下位尺度における性差を検討するため、対応のない  $t$  検定を行ったところ、男性より女性の方が「学習・進路」「心理・社会・健康」「先生への不満」の悩み・深刻度が高いことが明らかになった。

そして、悩み・深刻度が被援助志向性及び援助要請行動に与える影響を検討した。その結果、男女ともに、「学習・進路」「心理・社会・健康」「先生への不満」の悩み・深刻度が高いほど、悩み・深刻度が援助要請行動を促進することが明らかになった。

また、女性において、「学習・進路」の悩み・深刻度が低い場合よりも中程度以上である場合に、悩み・深刻度が複合的ヘルパーに対する被援助志向性を高めることが示唆された。これは、高校生にとってサポートを得やすい教師との関係性や信頼感が築かれていることにより、被援助志向性及び援助要請行動が促進されることによると推察される。

「心理・社会・健康」領域では、男女ともに、悩み・深刻度が高いほど専門的ヘルパーに対する被援助志向性を高めることが示唆された。現代における高校生は、スクールカウンセラーなどの専門家に関する知識や接する機会などが増えたことで、専門的ヘルパーに対する被援助志向性が促進されたと考える。

「先生への不満」領域では、男女ともに、悩み・深刻度が高いほどボランティア的ヘルパーに対する被援助志向性を高めることが示唆された。不満の対象である先生を共通して知っている学校内の友人や先輩後輩に援助を求めたいと思いやすいことが推測される。また、女性において、「先生への不満」の悩み・深刻度が高いほど複合的ヘルパーに対する被援助志向性を高めることが明らかになった。これは、先生への不満がある場合、その悩みを解決し得る人物として、当事者である教師や他の教師に相談することで、援助への期待感高まることが関係しているためであると考えられる。